

東日本大地震が露わにしたもの——共同体の再生と地域エゴの克服

拓殖大学総長・学長ノ開発経済学

渡辺利夫

東日本大震災を受けて考えさせられたことが二つある。この内の一つは美しく、一つは醜い。要するに断裂的な感覚である。感じるままに述べておきたい。

東日本大震災以前、多くの日本人は、家族を中心とした血縁・地縁共同体に価値を求めず、自由な個として生きることが善^よしとする気分の中に漂っていた。むしろ血縁や地縁は自由な個として生きることを拘束するものとさえ考えられていたのではないか。「個人の尊厳」といえば、大抵の無理が通ってしまふような空漠たる社会の中を私どもは生きてきたのではないか。

しかし、東日本大震災が私どもに露わにしたのは、少子高齢化に悩まされながらも逞しく息づく共同体の姿であった。あの悲劇に立ち向かったのは、共同体に寄り添い力を合わせて復旧・復興へと向かう血縁・地縁共同体の強靱な絆であった。惨劇に見舞われながらも、地を叩いて泣き叫ぶ者はいない。巨大な悲しみが静かに広がっているだけであった。

秩序と規律を乱すことなく、死せる者を深く哀悼しみずから立ち直っていく人々の姿に、屈することのない共同体の姿を私どもはありありとみることができた。血の通い合う共同体なくして人間は人生をまっとうできない。個としての人間がいかに儂く頼りないものであっても、それぞれの個は共同体につながることによって生きる力を与えられるのであろう。

しなやかな共同体に支えられて、国家もまた初めてしなやかな存在となる、少なくとも私はそのように想像力を掻き立てられた。あの惨事に際して自己犠牲を厭わず救援活動に打って出た自衛隊、警察、消防、海保の隊員達、医療従事者の行動の中に私どもが再発見したものは国家ではなかったか。決して政府ではない。首相官邸の司令塔機能は信じ難いほどに拙劣であった。政府の対応がいかに拙くはあっても、むしろ拙ければ拙いほど、公の意識をもって献身する隊員達の行動の中に、人々は国家というものの存在を心に深く刻みつけたにちがいない。

国家とは、国民が安んじてそこに帰属し、主権を断固として守り、国民の生命と財産を守護することを運命づけられた大いなる共同体である。政府とは、国家を運営するために必要な機能体以上のものではない。災後に首相や担当大臣が発した言葉には嫌悪の情しか湧かなかったが、陛下が残されたビデオメッセージや被災地慰問のお姿に心を揺るがせた国民はきわめて多かったと想像される。国民は、国家と政府が異次元の存在であることを本能的に知っている。局限状況におかれていよいよ強く、そう知らしめられたのであろう。

日本人の精神の一番奥深いところにある共同体の精神と原理が消失していない以上、いずれ被災地

は復興するにちがいない。長い平成不況の中を漂い、かといって食うには困るわけでもなく、ただ寡黙に沈殿してきた日本の国民に、国家と共同体の重要性を悟らせたものが東日本大震災であったとすれば、これは天罰ではなく天恵であったと受け止めねばならない。

陛下のお言葉には、私どもが求めねばならない共同体のありようが深々と表出されていた。東日本大震災が日本人に問いかけているものは、懐の深い共同体をもたずして人間が豊かな生をまっとうできない、そういう人間としての本質にかかわる問いではなかったかと思う。

大震災から一年が経つ。肉親や地縁の人々を失い、行方不明の人々がまだ三〇〇〇人を超えている。さまよえる魂に慚愧の思いを深くし身をよじるような苦しみに苛まれ、哀悼と鎮魂を繰り返してなお癒されぬ己れに鞭打ち、復旧・復興へと歩を進めているというのが被災者の現実なのである。これら同胞の窮境に対して、何という仕打ちであろうか。県内施設では処理不能な瓦礫が、県外自治体の受け入れ拒否に遭っていきどころを失い^{うづたか}積み上げられ、復旧への重大な障害となっている。福島県では県内処理が原則とされている。何と酷いことか。

瓦礫の受け入れを表明した神奈川県黒岩知事が県民の理解を得ようと開いた対話集会の様態をユーチューブでみた。知事が受け入れを表明している宮古市や南三陸町の瓦礫の放射線量は、東京都を受け入れている瓦礫の線量より低く、政府が設定した基準値を超えるものではないと知事の説得は条理を尽くしていた。しかし、会場は異様に剣呑な雰囲気^{きんげん}に包まれ、“嘘をいうな”、“万一被害が起

きたら責任はお前だぞ”といった怒声がとぎれとぎれに聞こえる。

神奈川県民の抵抗がここに写し出されたほどに強いとは到底思えない。むしろ大半の人々は“日本人として瓦礫の受け入れは当然のことだ”と考えているにちがいない。他方、不安に耐えられず安心を徹底的に追求しなければ心休まらない過剰心理の人間集団は、いずれの社会にも必ずや存在する。この心理を煽る政治集団もまたこの社会にも棲息する。彼らは合理的な説明のすべてを拒絶し、あたかもそれが正義であるかのように振る舞う。小集団ではあれ、いや小集団であればあるほどその声は一段と大きい。

「東日本大震災が日本人に問いかけているものは、懐の深い共同体をもたずして人間が豊かな生をまっとうできない、そういう人間としての本質にかかわる問いではなかったかと思う」。別のアングルからだが、前節の終わりのフレーズに再び戻らざるをえないのである。